
AP**吾妻 涼**

リュシフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AP 吾妻 涼

【Nコード】

N1175D

【作者名】

リュシフェル

【あらすじ】

天上界から、人間界へ。今度のテーマはお笑い。ダウントウンも、出てくるよーん。

プロローグ（前書き）

おひさしぶりっけつ。今度はコメディイです。リュシフェル作の「幸福の王子様」を読んでくれた後だと、より楽しめると思います。

プロローグ

A P 吾妻 涼

リュシフェル

「リュシフェル」

「何だよ、大和田」

「オレの新しい仕事が、見つかった」

「知ったこつちやねえ」

「頼むから、聞いてくれ」

「嫌だぴょーん」

「オレは、プロデューサーになる事にした」

「勝手になればー、ぴょーん吉」

「いいから聞け、すごいやつらを見つけたんだ」

「俺よりもか？」

「いや、それはっ」

「まあ、いいよ。勝手にしてくれ。お前の自由だ」

「それで、リュシフェルもオレと一緒に、人間界に墜ちてほしい」

「はあっ？」

「頼む」

「嫌だぴょーん」

「じゃあ分かった、ちゃんと話す」

「最初からそうしてろっ」

「分かった。松本と浜田という二人組で、コンビ名はダウンタウン」

「ダウン。ノックダウン」

「真面目に聞いてくれ」

「タウン。タウンページ」

「真面目に聞けっ。二人はお笑い芸人で、すごく稼ぐ」

「そのどこに、俺とお前が必要あるんだよ」

「いや、だから、オレがプロデューサーになって」

「二人の稼ぎをピンハネすると」

「そのどこが悪い」

「大和田、お前は確実に腐っているよ」

「もう、決めたからな」

「で、俺は何をしると」

「オツ、オレの右腕だ」

「はあっ？何で、俺が、お前ごときの、はあっ？」

「頼むつ。これが、最後のお願だから。頼む、このとうりだ」

「てめえ、それが何回目だ。だいたい、お前にお笑い分かるのか？」

「だから、そこをリユシフェルが手伝ってくれ」

「正直、面倒くせえ。どうなっても知らねえからな」

「いいのか？」

「ああ、面倒くせえ」

「これで、オレは大金持ちに」

こうして、いざつ、人間界へ。

「あつ、大和田、言い忘れてた。俺、お前なんかの言うこと聞かねえからな」

「嘘だろ？」

「本当だぴょーん」

さて、どうなることやら。

プロローグ（後書き）

コメディイなので、これから、おもしろくなっていくと思います。
未永くよろぴく。

ページ1 競艇試験(前書き)

おひさしぶり。また、書くよ。

ページ1 競艇試験

競艇試験

リュシフェル

「ふーん。競艇場ねえ」

「じゃあ、オレは用事があるから」

「死ね、クソ大和田」

「じゃあ、これから試験を行う」

(誰だこのおっさん)

「ちよっ、ちよい、君」

「はい」

「今、どういう状況？」

「えっ？競艇の試験ですけど」

「何じゃそりゃあ。君、名前は？」

「浜田、ですけど」

「そうかー、君が浜田かー」

「えっ、俺のこと、知ってるん？」

「明らかに、初対面です」

「ふふん。名前は？」

「あつ、やべえ、俺まだ名前きめてない」

「えっ？どういうこと？もう、試験始まりますけど」

「まあ、いいか、名無し君で」

「えー、次、浜田」

(どうぞやら、このおっさんは、教官らしい)

「はいっ、浜田です」

「えー、次、名無しの権兵衛？」

「はいっ、名無しです」
教官も、みんなも、困惑している。
「教官の川崎だ。お前ら二人、生意気そうだから、オレが担当する」
「はいっ、よろしくお願いします」と、浜田。
「よろぴく。」と俺。

「お前ら二人のうち、一人は、必ず落とすからな」と、川崎教官。
(もっつ、マジむかつく。顔といい、態度といい)
「えっ？何で必ず落とすん？」と、浜田。
「えっ？教官がクビになるん？」と、俺。浜田、笑う。
「笑ってんじゃねえっ、両方落とすぞ」と、川崎教官。
「はいっ、すいませんっ」と、浜田。
「はいっ、川崎とやらの首、絞め落とすぞ」と、俺。浜田、笑う。
「お前ちよつとこつちこい」川崎教官、切れる。
「ホイ、ホイ」と俺。そして、川崎教官を蹴る、蹴る、蹴る。
「ゴミは、ゴキブリホイホイへ」川崎教官を湖に、蹴りおとす。
浜田、笑い転げる。

「名無し君、いいん？落とされるで」
「名前、決めなきゃな」と、俺。まるで、考えてない。
湖から、這い上がるうとする川崎教官の手を蹴る、蹴る、蹴る。
「お前ら、何やってるんだっ」他の教官たちが、来る、来る、来る。
「川崎教官が、溺れるふりをみせてやるって」と、俺。
浜田、驚く。そして、笑う。

湖から、あがってきた川崎教官。ゲホ、ゲホ、ゲホ。
「お前ら二人とも、合格だ。オレが徹底的にかわいがってやる」
「ふふん。いいん？」と、浜田。
「ふふん。かわいいん？」と、俺。

こうして、めでたく？二人とも、合格。パチ、パチ、パチ。

ከዚህ ህግ በኋላ ስለሚገኝ ጥያቄ ማረጋገጫ ማድረግ ይገባል።

ページ1 競艇試験(後書き)

評価してちょ。

ページ2 競艇？（前書き）

競艇試験に、合格して、浜田と合宿。早くも、ひとりの教官と対立。てな、とこです。

ページ2 競艇？

ページ2 競艇？

リュシフェル

競艇試験も、終わり、合宿が始まった。

(ふーむ。予定外だ。どうすっぺ)

「あの、名無しさん。浜田雅功といいます」

「ふーん。浜田何とかさん？どうすっぺ？」浜田、笑う。

「あの、名前だけでも教えてくれへん？何もできへんけど」

「名前がないさー。やる気もないさー」浜田、笑う。

「あの、出身地はどこなん？さつきから、いろんな方言が」

「どこだべさ？どこでも、いいべさ？」ふぶん。浜田、笑う。

「何ものなん？」そろそろ、呆れ顔の浜ちゃん。

「まて、名前は、今決める。そうだなあ「涼」でいこう名前は」

「えっ、じゃあ、「涼はん」と呼ばしてもらいます。浜田です。よ

ろしくお願いします」

「浜ちゃんと呼ばしてもらいます。よろしくお願いします」

そして、本格的に合宿が始まった。

「えー、まず、ボートには正座して乗る。そして、まず最初に覚えてもらいたいのは、転覆したときの対処法だ」教官が、グダグダ言っている。

「えー、浜ちゃん。まず最初に覚えてもらいたいのは、川崎教官のぶっ飛ばし方だ」

「ふぶん。」浜田、笑う。

「てめえら、いい加減にしろ」川崎教官、切れる。

「あぁっ！」俺も、切れる。一触即発。わーお。

「涼はん、とりあえず、話だけでも、ちゃんと聞かん？」と、浜ち

やん。

「えっ、じゃあ、教官。もし、俺がボートの転覆、回避できたら、川崎教官をぶっ飛ばしていいですか？」

「やれるもんならやってみる。そのかわり、もし、お前ができなかつたら、オレがお前をぶっ飛ばす」と、クソ川崎教官。

ボートに乗り込む俺。

「ボートの中で、正座してと。ふんっ」ボートと一体になって、横に空中で一回転。これじゃあ俺、転覆しねえ。

「おおー」みんなから、歓声があがる。

「ウソだろ」と、川崎教官。ボートから、あがる俺。そして、すぐさま、川崎教官に、ローリングソツバト。吹っ飛ぶ川崎教官。

「おおー」みんなから、歓声があがる。

「涼はん、ごっついね」と、浜ちゃん。うれしそう。

「浜ちゃん。あの向こうの桟橋いるやつだれ？」と、俺。

「あっ、松本。」と浜ちゃん。

さて、どうなることやら。

ページ2 競艇？（後書き）

やっと、ダウンタウンのふたりが出てきたよーん。こっ、ご期待。

ページ3 競艇合宿終了(前書き)

浜ちゃんと一緒に競艇合宿に入り、松本人志と出会い、川崎教官と対決するところです。

ページ3 競艇合宿終了

競艇合宿終了

リュシフェル

合宿が着々と進む。もう、みんなちゃんと乗れるようになってきた。なんと一番速いのは俺だった。一番やる気ないのに。そして二番手が浜ちゃん。そして、いつもの場所に松本人志。

「涼はん、そろそろ俺とコンビ組まへん？」と、松本人志。

「もう、お前は、組む相手間違えてるよ」と俺。

「何で？何があかんの？」

「おかんがあかんの」と俺。

「くふ。えーもう、涼はんとコンビ組みたい」と、松本人志。駄々っ子だ。

「お前、うるさいな」と、浜ちゃん。

「えーもう、浜田からもお願いして」と松本人志。

「えーもう、浜田、そろそろ川崎教官をぶっ飛ばそう」と俺。

「えっ、涼はん。何、突然。川崎教官シバクのは合宿終わってからちやうん？」と、浜田。

「でもって浜ちゃん。俺、卒業するつもりないし」と俺。

「えっ、涼はんが一番乗れてるやん」と浜田。

「まあまあ、いいからいいから」と俺。

「じゃあ、俺が卒業する」と松本人志。

「お前、関係ないやろ」と、ツツコム浜ちゃん。三バカトリオです。と、うわさの川崎教官がやってくる。

「お前からここで何してる。あ、お前部外者だろ」と川崎教官。

「じゃあ、部外者は消えます。涼はん愛してるで」と松本人志。

「吾妻涼と浜田。お前から簡単に卒業できると思うなよ」と川崎教官。

「じゃあ、俺競艇あきらめます。そのかわり川崎とやらをぶっ飛ばす」と俺。

「ま、涼はん。ここはおさえて」と浜ちゃん。

「お前ら、オレに喧嘩で勝てると思ってるのか？」と川崎教官。

「喧嘩でも、競艇でも、どっちでもかかってこいや」と俺。

すると、川崎教官の右フックが俺のコメカミに。が引いてかわし、俺の左ボディーを川崎教官に見舞う。川崎教官、のたうちまわる。

「お前、よわつ。じゃあ次は競艇で」と俺。

「涼はん。おもしろいなー、こいつシバクの」と浜ちゃん。

「げほ、げほ。ちょ、ちよつとまで。吾妻涼、お前格闘技か何かや
つてたのか？」と、苦しみながらの川崎教官。

（ふーん。ちゃんと競艇用のボートあるじゃん）

「浜ちゃん、これはめて」

「涼はん、軍手？」

「うん、軍手。で川崎教官をボートに乗せよう」

「うん。」俺と浜田のふたりで、川崎教官をボートにねじ込む。そして、逆さにする。ゲボ、ゴボゴボ。

「そろそろかな？浜ちゃん」と俺。

「涼はん。殺すん？」

「うん」かわいく答える。遠くで見ていた松本人志が、こつちへや
つてくる。

「ふふん。涼はん、もう死んだんちゃう？」と、松本。

「松ちゃん。俺たち三人は向こうの森で遊んだ。いいな？」

「うん」と浜ちゃん。

「はい」と松ちゃん。

「えー、昨日、川崎教官が湖で死んでいるところが発見された。何か知っているものがいたら、刑事さんに申し出るように」と、教官。静まりかえる合宿所。どうでもいい俺。にやにやしてる浜ちゃん。そして、なぜかさりげなく、関係ないのに合宿所に忍びこんでる松本人志。各自、刑事さんに話を聞かれているが、川崎教官の悪口しかでてこない。俺たち三人のアリバイも、結局崩されなっかた。

(バイバイ、川崎教官)

そして、事件のほとぼりも冷めたころ、俺も浜田も途中で合宿を辞退した。そして、競艇合宿も終わった。以上。

ページ3 競艇合宿終了（後書き）

えー、今回は本当にすいません。コメディイなのに、あまり笑えるところがありません。これから漫才編に入っていくと思うので、それまでではごめんなさい。

ページ 4 ギャンブル(前書き)

競艇合宿をやめてブラブラしてるところです。

ページ4 ギャンブル

ページ4 ギャンブル

リュシフェル

「はあーあ」俺こと吾妻涼と浜田、そして松本人志。何もやることがない。どうしましょう？あつ何かひらめいたような松本人志。

「涼はん、わかった。俺と一緒に大阪の吉本興業入りましょ」

「いややん。俺、涼はんと一緒にヤクザになるん」と浜田。

「どっちにしるとりあえず金を作ろう。競艇見に行こ。競艇なら俺も浜田も何とかなるだろ」と俺。さすが。

全日本競艇選手権という垂れ幕がいたるところに見つけられら。

「何か浜田、すごいことになってる」何気に競艇を見るのは、初めてな俺。

「そっかー、もうそんな季節かー」浜ちゃん感激。

「えっじゃあ涼はん誰に賭けたらいいか教えて。そつとね」

「何で、そつとやねん」と浜ちゃん。さすが。

(そっかー、こいつらがコンビ組むんだよなー)

とりあえず手分けして下調べすることに。すると、思いつめた顔をした変なオッサンが近づいてきた。身構える浜ちゃん。どうでもいい俺。逃げ出す松本人志。

「あの、菅原文太の下に付いているものです。決して怪しいものではないです」と十分怪しいオッサンが言う。文太ねー、いい話かも。

「で、文太の下っ端が何か？」

「はい、全日本競艇選手権に出てみませんか？あつしのかわりに。話はあつしがつけるので」と深ぶかと頭を下げる怪しいオッサン。

「えっ涼はん、大丈夫な人？」やっと戻ってきた松本人志。

「涼はんやめとこ。十分怪しい話やん」さすが浜ちゃん。
「浜田、俺、怪しい話大好き」てへ。「で、どうすればいい？」

なんと俺が6枠で全日本競艇選手権に出ることになった。

「やったー。涼はんすごい」と本当にうれしそうに浜ちゃん。

「えっじゃあ涼はんはんに賭ければいいの？」と松本人志。

「浜田、これ俺の全財産。単勝で俺に賭けといて」

「うん。涼はん、俺金借りてくる」消費者金融に向かう浜ちゃん。

「えっまだ涼はんが勝つと決まったわけじゃないやん」びびりの松本人志。

「やったー涼はんが勝ったー」イエイ、俺の圧勝。

「うし。金もらって早いとこずらかるう」浜田から大金を受け取る。

「えっちよつと待った。俺ちよつとしか賭けてない」と松本人志。

「知るかつお前の責任やる。やったー」とうれしそうに浜ちゃん。

浜田と一緒に消費者金融に向かう。

「涼はん、俺、涼はんが負けたらヤクザになるしかないと思ってた」

「ふーん。そうなつてたら、多分俺も、一緒になつてたと思う」

消費者金融で浜田がお金を返す。大金だ。

「浜田、こんなに借りてたのか」と俺。

「うん。絶対涼はんが勝つと思ってたから」さすが浜ちゃん。

「俺、ちよつとしか賭けてない」と松本人志。うるさい。

結果、大金持ち浜ちゃん。小金持ち俺。へなちよこでたいしてお金持っていない松本人志。さてどうなることやら？

ページ4 ギャンブル(後書き)

なるべく早く「漫才編」にいけたらなと思っています。

ページ 5 吉本入り（前書き）

吉本興業に入るまでの話です。

ページ5 吉本入り

ページ5 吉本興業入り

リュシフェル

俺、松本人志、浜田の3馬鹿トリオでこの先のことを話し合う。とりあえず金はある。さて、何しよう？

「涼はん、これからどうする？オレとしては涼はんと吉本興業入りたいんやけど」珍しく真面目な顔の松本人志。

「うん。それでいいんちゃう。オレはどないしようかな」寂しげな浜ちゃん。

「このままいくといいんだけどな。どうせ邪魔するやつが出てくるだよな」と俺。

「くっくっく。ルシファー、金ができたようだな」ほら、出てきたこいつが大和田。俺の天敵。元全宇宙の支配者。ついでに競艇合宿のときに殺したはずの川崎教官まで、大和田のとなりでニヤニヤしている。

「涼はんっ川崎教官もおるやん。何で何で、死んだはずやん」驚いた顔の浜ちゃん。

「浜田、人間はとくに天上界にいけないような人間はそう簡単には死んでも、消えてくれたりはしない。残念だけだな」と俺。

「はーまーだー、とりあえず落ーちー着けー」あいからわずこんな状況でも、おもしろい松本人志。

「くっくっく、ルシファー早く金を出せ」と元全宇宙の支配者の大和田が言う。

「えっ涼はん、ルシファーって涼はんのこと？」心配そうな浜ちゃん。

「ああ。正式にはリュシフェル。俺の名だ。大和田は俺のことをル

「シファアと呼ぶ。そう呼ぶなどは言ってるんだけどな。いつも邪魔される」

「何かややつこしいことになってきましたねー。涼はん言う事きかないといけないの？」面倒くさそうな松本人志。

「今まではな。浜田、大和田のいうこと聞いて金出すのと大和田とクソ川崎教官をぶつとばし敵にまわすのどちらがいい？」

「涼はんさえよければこいつらシバキたい。ごつつシバイてまわりたい」もう、臨戦態勢の浜ちゃん。そうこなくちゃ。

「大和田、お前は今まで俺がでてくるまで、全宇宙の支配者だった。それに敬意を払い俺は散々フォローしてきただろ？この二人まで敵にまわすとお前も、お前の家族も、お前が今手にしているすべてのものを失う可能性がある。それでもいいのか？」

「こんなやつら敵にまわしたところでどうにでもなる。それともルシファア、オレに刃向かうのか？」余裕たつぷりの大和田ちゃん。

「もう、お前は終わりだよ大和田。浜田、好きにしろ」もうあきらめた俺。浜田がとりあえず川崎教官をシバク。もう、ボッコボッコに。楽しそうな浜ちゃん、いい顔している。困惑する大和田。笑いこぼる松本人志。

「えっ涼はん。こいつもシバイていいん？」と言いつつ大和田を殴り始める浜ちゃん。

「いいけどもう殴ってるじゃん」そうこなくちゃと思う俺。

大和田をシバキ続ける浜ちゃん。すごく楽しそうだ。

「涼はん。川崎教官は動かなくなっただけどこいつなかなか粘る」と殴り続けながらの浜ちゃん。

「浜田。大和田、不死身。人間界での概念での死は訪れない」あーあと俺。

「えっじゃあ永遠にシバキ続けていいってこと？」驚く浜ちゃん。

「浜田さえその気なら。できる？」

「うんっ」うれしそうな浜ちゃん。松本人志が持ってきたロープで大和田に首輪をする。やったー浜ちゃんいくら殴ってもいいペット、ゲット。殴っても殴りたりないけどね。

「涼はん。浜田の次はオレのフォロイヤン。吉本興業行こ。オレお笑いやりたいねん」またまた真面目な顔の松本人志。

「別にいいけど。そのかわり浜田も一緒に」

「えっ涼はん。こいつも一緒なら」そこには首に首輪をされ無残な姿をした大和田が土下座をしていた。

吉本興業、到着。さっそくテストらしい。緊張した顔の松本人志。普通の顔の俺。ペットをつれてうれしそうな浜ちゃん。が、浜田が大和田をつれて事務所にはいるとおかしなことになる。

「大和田様だ」と事務所にはいた職員。

「大和田だ」と偉そうな人。

「えっ涼はんどういうこと？」怪訝な顔の浜ちゃん。

「浜田、今お前がペットにしている大和田は不死身のため、全人類が倒すことをあきらめてしまったやつなんだ。すごいぞ浜ちゃん」
「やっ和大和田を敵にまわせるやつが現れた。うほほい。」

「ふふん、そうなんだ。まあ俺のことはいいから二人の吉本入りの話を、俺は大和田とやらをシバイてますから」さすが浜ちゃん。

「あー、私も蹴っ飛ばしていいですか」事務所の女性スタッフが
おそるおそる手を上げる。浜田が了解すると事務所の人間全員が大和田をシバキはじめる。

「あー、俺達の吉本興業入りの件は？」おそるおそる聞く松本人志。しかし事務所の人間はそれどころではない。だってあの大和田をシバクことができるのだから、復讐を恐れずに。やっ和スタッフ一人をつかまえる。すると大和田をシバキ続けられるならと結局テストもせずに、俺と松本人志、それになぜか望んでいないのに浜田の吉本興業入りが決定した。ありがとう恨まれて大和田ちゃん。

わびやいなるじやせら。以上。

ページ5 吉本入り(後書き)

なかなか更新しなくてすいませんでした。今後ともよろしくお願
い
します。

ページ6 初漫才(前書き)

俺、吾妻涼とダウンタウンの二人の吉本入りが決まったところです。

ページ6 初漫才

ページ6 初漫才

リュシフェル

吉本興業入りを記念して俺吾妻涼と松本人志で、スタッフと浜田の前で漫才を披露することになった。しばらく堪能してください。

「えー、では漫才をするということ。普通、最初にコンビ名を言うと思うんですけどオレ等にはコンビ名すらない。何で？」

「えー、今話してたのが松本人志とお笑い意外なにもできないドスケベ君です。そして俺が、吾妻涼とやってただのかっこいいお兄さんです」

「なんでやねん。二人の紹介に差がありすぎるやん」

「まあ、本当のことを話したということ」

「え、涼はん。こっからどうしたらええの？」

「じゃあ、何かテーマを決めよう」

「じゃあ、女について。涼はんは女性についてどう思ってる？」

「俺は生きていくための希望。君は生きていくための欲望でしょ」

「何でやねん。オレにとっては女性は生きていく支えかな」

「遊んでるくせに。俺まで童貞だぞ」

「やったー、涼はんは勝ったー。あつ涼はん童貞なんや」

「別に、悪いことではないだろ。遊んでるよりは良いと思うんだけど。女性を大切にしているということ」

「いやいや、それは違う。やっぱり抱いてなんぼだと思っねん」

「だってお前の恋は抱いたら終わりだろ」

「えっまって待って。童貞には言われたくない」

「俺は愛に変わる恋がしたい」

「うん。今のセリフかっこよかったね。オレもどっかで使わしてもらうわ」

「え、じゃあ、お前何人女抱いた？」
「涼はん。数えてみたんやけど指がたりひん」
「それが恋、または愛と言えるか」
「ままあ、くわしくはセックスしたいだけみたいな」
「ダメじゃねえか」
「童貞に言われたくないわボケー」
「もう、俺童貞なんて言わなきゃよかった」
「涼はん、分かった分かった。もう言わへん。これからは涼はんをチエリーボーイと呼ぼう」
「えー、じゃあ初漫才はこれで終わりということぞ」
「涼はん、涼はん。まだ終わらへん。みんな笑ってるやん」
「これから女でも、抱きにいこうかと思って」
「オレの使い古しなら紹介するよ」
「いらねえよ」
「怒らないでくださいよ、チエリー」
「はあーあ。風俗でもいいか」
「えっじゃあ、チエリー君。風俗王のオレ様が紹介したる」
「使い古し？」
「ちやうちやう。中古品」
「はあーあ」
「以上、新入り二人組みでした」

初漫才にしては結構、好評だった。これからコンビ名を決めて、とりあえず舞台上でデビューすることになった。前座だけどね。以上。

ページ 6 初漫才（後書き）

これからは漫才編が続きます。楽しんでいただけたら幸いです。

ページ7 タウタウで漫才(前書き)

吉本入りし初舞台です。

ページ7 タウタウで漫才

ページ7 「タウタウの漫才」

リュシフェル

浜田は大和田をシバクので忙しいということ、俺吾妻涼と松本人志で大阪の街をぶらぶら。吉本興業のスタッフにコンビ名を決めたいと言われたのでふたりで適当に考える。

「涼はん、かつこええコンビ名にしよう。俺ら二人やっぱりかつこええやんか」

「一人の間違いじゃない？」

「ああ、かつこええのはオレひとりか」

「コンビ名かー」

「涼はんっ今、ツツコムところやん」

「あ、タウンページがある」

「じゃあ、コンビ名はタウンとページで。じゃあ次、涼はん。あだ名も決めよう。オレ松本っていう名字はどうでもいいんやけど、人志って名前はオレには重すぎる気がすんねん」

「じゃあ、「で」と「な」を付けて人でなしで。意味も、ぴったしだし」

「人でなしかー、何でそんなに簡単に思いつくん？」

「人志、改めフトシでもいいよ」

「じゃあ、人でなしで」

「了解」

「涼はんのあだ名は童貞君とチェリーどっちがええ？」

「チェリーで。何か、かわいいじゃん」

「やめた。涼はんがいじけないとつまらん。じゃあ、涼はんは涼はんで」

そうこうしているうちに初舞台の時間が。前座で漫才をすることになっている。まあ、前座のさらに前座だけだね。そろそろ始まる

よー。

「どうもー、涼はんシャキシャキ動けー。ボケつまったく」

「どうもー、タウタウです」

「えっ涼はん。タウタウって何？」

「忘れたのか、人でなし。俺らのコンビ名だろ」

「フツツ。全然、聞いてへん。まあ、ええわ。今日は何をテーマにする？」

「二匹のブタで」

「えっ何それ？」

「初舞台のブタと俺のとなりにいるブタ。それがテーマで」

「舞台のブタは上手いと思うけど、何でオレがブタやねん。ブヒッ」

「一応、鳴くんだ。てへ」

「え、じゃあオレがブタなら涼はんは何？」

「オオカミ。てへ」

「なんでやねん。それじゃ涼はんの方がかつこええとみんなが勘違いするやん」

「ブタとオオカミのコンビかー。まあ、俺は羊しか食べないオオカミだけどね」

「どうせなら食べてみ。ブヒッ」

「意外と気に入っているんだ。コンビ名はタウタウでいい？」

「ブヒッ」

「ふふつ。じゃあ、タウタウで。どうもータウタウでしたー」

「まだ早いだブヒー」

「ごめんなブタさん。俺は食べにいくぜ。羊という名の女を」

「この童貞オオカミがっ。ブヒッ」

「もう、その話はなしにしようよ。童貞とチェリーは」

「勝ったー。ブヒッ」

こうして前座のさらに前座だけでも、初舞台は終わった。ブヒッ。

ページ7 タウタウで漫才(後書き)

続編も期待してくれたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1175d/>

AP吾妻 涼

2010年10月9日11時21分発行